近年の高校生の人間関係に関する一考察
―― 学校外における友人関係を中心に ――

辻　　泉

1．はじめに

近年，若者の人間関係が捉えにくくなってきたと言われる中，それに関する議論が盛んである。特に，家族や学校，地域社会といった，既存のもの以外の人間関係の比重が高まりつつあるのではないか，という点が注目を集めており，そうした人間関係に対しては，「居場所」や「第四空間」などといった新たな言い表し方がなされている（例えば田中編著 2001，高橋監修 1995 など）。また 1996 年の中央教育審議会の第 1 次答申でも，「第 4 の領域」という言及がなされ，行政的な施策の観点からも注目されつつある（文部省編 1996）。

本論文が分析対象とする高校生の場合，学校（＝高校）外の友人関係が，まさにこれに相当するのではないだろうか。そこで，近年の高校生におけるそれが，いったいどのような実態にあり，そして彼／彼女ら自身が有する人間関係全体の中で，どのように位置付けられているのか。こうした点の理解を深めていくことが本論文の目的である。

筆者は以前，首都圏在住の高校生を対象に，この点に関する事例研究を行ったことがある。その結果，学校外の友人関係についての一般論と同じようには，素朴に“逸脱”や“非行”と括れず，むしろ同じ趣味を媒介にして学校外，学校内いずれの友人との関係も「円滑」であるというような実態が浮かび上がった[1]（辻 2001a，2001b）。しかしながら，事例が女性に限定されていたことなど，知見の一般化には課題も残されていたため，今回，既存の調査データの 2

次分析を行い，議論をさらに展開させていきたい。

なお2次分析は，知見の一般化や再検証を試みるのにあたり，（近年，本格的なデータアーカイブが開設されたこともあり）とりわけ筆者のような若年の研究者にとっては，利用しやすい貴重な方法である（佐藤・石田・池田編2000）。もちろん，既存の調査であるだけに，いくつかの問題点もありうるが，こうした点についても後に触れてみたい。

2．先行の議論について

高校生の学校外での友人関係は，これまで一般的には非行や逸脱と結びつけられる事が多かったように思われる。すなわち，主に家族や学校，地域社会といった既存の人間関係で「疎外」されたものが形成するものとされてきたのである（例えば，間宮・田中・真仁田・原野・高橋監修1991など）。さらに言えば，そもそも学校外に友人形成をする段階で，家族や学校といった“本来所属すべきである”集団において「疎外状況（愛情への欲求不満や自己否定的な感情）」にあるのだという[2]（住田・高島・藤井1999）。

そして，形成される集団の性質については，2通りの捉え方があるように思われる。すなわち，ひとつには“本来所属すべきである”集団において「疎外」されて形成される集団ゆえに非行に走りやすい，という捉え方であり[3]（例えば，住田・高島・藤井1999など），もうひとつは，むしろであるからこそ，そこに“対抗的な自立”を通した社会化の可能性を見出そうとする捉え方である[4]（例えば，Willis1977＝1996など）。

それでは，果たして近年の高校生における学校外の友人関係とは，どのようなものであり，彼／彼女らはそれを自分たちの人間関係の中に，どのように位置付けているのだろうか。以降で検討しよう。

3．分　　析

3．1．調査データの概要と分析方法

ここで用いるのは，1993年6月19日～27日に生命保険文化センターを調査実施者として行われた，『若者の生活意識に関する調査－集団に対する意識を中心として』の調査データである。この調査は，若者の日常生活全般に関する把握を目的に行われ，調査対象は首都50km圏在住の16～26歳の男女個人，サンプリングは層化2段無作為抽出法によって行われ，サンプル数は2,000人，有効回収数は1,188人（有効回収率59.4%）であった。本論文では，これらの有効回収数のうち，調査当時の年齢が16～18歳の高校生269人（男性が135人，女性が134人）を分析対象とする[5]。

分析に用いる質問項目は，「日頃，重視している人間関係（複数回答）」「家族や学校，そして学校外における友人関係などの人間関係に対する意識」「規範意識」などである。

とりわけ学校外の友人関係が，家族や学校といった他の人間関係を含めた中で，どのように位置付けられているのかという点に注意を払いながら，主にクロス表分析を行う。以前に筆者が行った事例研究の対象者が，女性に限定されていたという点からも，男女差については大きな注意を払いたい。

3．2．高校生が重視する人間関係

まず，高校生はどのような人間関係を重視しているのだろうか。「あなたは，現在の日常生活全般を考えた時，どんな人との付き合いを大切にしていますか（複数回答可）」という質問に対して「あてはまる」としたものの割合を表記し，さらに性別をクロスさせたものが次の表1である。男女差については，χ二乗検定を行って，1%水準で有意となる項目には3つ（＊＊＊），5%水準で有意となる項目には2つ（＊＊），10%水準で有意となる項目には1つ（＊）のそれぞれアスタリスクを付してある（以下同様[6]）。

すると，もっとも割合の多いのは，男性，女性ともに学校内の友人関係（現在の学校の友達）であって，それぞれ90.4%，90.3%とほとんどの高校生が重視しているのがわかる。そして，次に割合が多いのが親であるが，ただし親に関しては，女性のほうが重視すると回答した割合が多く，男性が35.6%であるのに対し，女性ではわずかながらにも半数を超える50.7%に達している。

さて，ここで注目すべきは学校外の友人関係（現在の学校以外の友達[7]）である。それを重視しているものの割合もまた女性のほうが多く，30.6%に達している一方で，男性は20.0%となっている。これらの差は興味深い。

表1．どんな人との付き合いを重視するか（複数回答可）

N（回答者数）	男性 135人	女性 134人	合計 269人
Q9．1．親　＊＊	48 35.6%	68 50.7%	116 43.1%
Q9．3．兄弟姉妹	36 26.7%	37 27.6%	73 27.1%
Q9．6．現在の学校の先生	10 7.4%	16 11.9%	26 9.7%
Q9．7．現在の学校の友達	122 90.4%	121 90.3%	243 90.3%
Q9．8．現在の学校以外の友達　＊＊	27 20.0%	41 30.6%	68 25.3%
Q9．9．交際している特定の異性	21 15.6%	13 9.7%	34 12.6%
Q9．10．その他	1 0.7%	1 0.7%	2 0.7%
Q9．11．特に誰ということはない	3 2.2%	2 1.5%	5 1.9%

3．3．高校生の人間関係に対する意識

次に，これらの人間関係のうち，特に本論文で取り上げる学校外の友人関係や，家族，学校における人間関係に対する意識について，次の8項目の質問が行われた。すなわち，「依存度，自由さ，リーダーの必要性，対等感，愛着感，安心感，信頼感，連帯感[8]」である。これらについて，「そう思う・まあそう

思う」と答えたものの割合を表記し，さらにそれぞれについて性別をクロスさせたものが次の表2～表4である。

表2は，「現在の（職場や）学校以外の友達との接し方についておうかがいします」という質問によって，学校外の友人関係に対する意識を聞いた結果である。対等感，愛着感，安心感，連帯感といった項目は，ほとんどの回答者が「そう思う・まあそう思う」と回答しており，男女差も見られない。

注目すべきは信頼感であり，この項目では，男性が59.3%であるのに対し女性が76.1%と男女差が大きい。このことは，先に見たように女性のほうが学校外の友人関係を重視しているものの割合が多いということと関連しているように思われる。また自由さについても若干の男女差がある。

次に，「家族との接し方について…」という質問によって，家族との人間関係に対する意識を聞いた結果が表3である。ほとんどが「そう思う・まあそう思う」と回答した項目としては，愛着感や連帯感などがあるが，このうちの連帯感については，男性が91.1%なのに対し，女性では98.5%とやや割合が高くなっている。

家族に対する意識については，この他にも男女間に有意な差がある項目がいくつかあり，いずれも女性のほうの割合が高くなっているのが特徴的である。例えば，依存度については男性48.1%に対して女性は64.9%，自由さについては男性49.6%に対して女性61.9%，信頼感についても男性32.6%に対して女性53.0%となっている。これらの項目の多くは，先に表1で見た結果において，特に親との人間関係を重視すると回答したものの割合が女性のほうが多かったということと関連があるように思われる[9]。

そして，次に「学校の先生やクラスメートとの接し方について…」という質問によって，学校における人間関係に対する意識を質問した結果が表4である。

ここでの項目は，学校内の友人関係に限定したものや，同じく先生との人間関係に限定したもの，あるいはその両方に関連したものに分かれていて，それ

表2．学校外の友人関係に対する意識

（「そう思う・まあそう思う」の合計。ただし※は質問が逆だったので「そう思わない・あまりそう思わない」の合計，以下同様。）

N（回答者数）	男性 135人	女性 134人	合計 269人
Q36. 1．校外友人・依存度 （※プライバシーを守りたい）	16 11.9%	16 11.9%	32 11.9%
Q36. 2．校外友人・自由さ　＊ （※自分よりグループ行動が優先）	22 16.3%	34 25.4%	56 20.8%
Q36. 3．校外友人・リーダー必要性 （リードする人が必要）	111 82.2%	103 76.9%	214 79.6%
Q36. 4．校外友人・対等感 （友達とは対等）	133 98.5%	131 97.8%	264 98.1%
Q36. 5．校外友人・愛着感 （友達はかけがえない）	131 97.0%	132 98.5%	263 97.8%
Q36. 6．校外友人・安心感 （いるとほっとする）	126 93.3%	127 94.8%	253 94.1%
Q36. 7．校外友人・信頼感　＊＊＊ （何でも打ち明けられる）	80 59.3%	102 76.1%	182 67.7%
Q36. 8．校外友人・連帯感 （友達同士で助け合う）	131 97.0%	127 94.6%	258 95.9%

表3．家族に対する意識

（「そう思う・まあそう思う」の合計。ただし※は質問が逆。）

N（回答者数）	男性 135人	女性 134人	合計 269人
Q26. 1．家族・依存度　＊＊＊ （※だんらんより自分の部屋）	65 48.1%	87 64.9%	152 56.5%
Q26. 2．家族・自由さ　＊＊ （※家族の行動優先）	67 49.6%	83 61.9%	150 55.8%
Q26. 3．家族・リーダー必要性 （家族の中心となる人が必要）	105 77.8%	102 76.1%	207 77.0%
Q26. 4．家族・対等感 （※親の言葉に従う）	59 43.7%	55 41.0%	114 42.4%
Q26. 5．家族・愛着感 （家族はかけがえがない）	128 94.8%	126 94.0%	254 94.4%
Q26. 6．家族・安心感 （家族といると安心）	109 80.7%	112 83.6%	221 82.2%
Q26. 7．家族・信頼感　＊＊＊ （家族に何でも打ち明けられる）	44 32.6%	71 53.0%	115 42.8%
Q26. 8．家族・連帯感　＊＊＊ （家族みんなで助け合うべき）	123 91.1%	132 98.5%	255 94.8%

表4．学校に対する意識
（「そう思う・まあそう思う」の合計。ただし※は質問が逆。）

N（回答者数）	男性 135人	女性 134人	合計 269人
Q29. 1.学校友人・依存度 （※級友との付き合いは校内だけ）	117 86.7%	118 88.1%	235 87.4%
Q29. 2.学校全般・自由さ　＊ （※学校行事には参加するべき）	34 25.2%	21 15.7%	55 20.4%
Q29. 3.学校友人・リーダー必要性 （クラスの中心となる人が必要）	106 78.5%	112 83.6%	218 81.0%
Q29. 4.学校先生・対等感 （※先生に従うべき）	53 39.3%	46 34.3%	99 36.8%
Q29. 5.学校全般・愛着感　＊＊ （学校に愛着）	89 65.9%	103 76.9%	192 71.4%
Q29. 6.学校全般・安心感 （学校生活は快適）	93 68.9%	103 76.9%	196 72.9%
Q29. 7.学校友人・信頼感 （級友を信頼）	113 83.7%	110 82.1%	223 82.9%
Q29. 8.学校友人・連帯感 （クラスみんなで助け合うべき）	124 91.9%	123 91.8%	247 91.8%

ぞれ表中では，「学校友人」「学校先生」「学校全般」と記した。だが，紙幅の都合上，分析は一緒に行う。

依存度，連帯感といった項目は，かなり多くの回答者が「そう思う・まあそう思う」と回答しており，男女差も見られない。

ここで，まず注目すべきは愛着感であり，男性が65.9%であるのに対し女性が76.9%と男女差が大きい。また自由さについても，今度は逆に男性のほうで割合が高く，若干の男女差が見られている。先に表1を見た際，学校内の友人関係については男女ともに9割以上が重視すると回答しており，学校の先生との人間関係ともども，その割合に有意な男女差はなかった。しかし意識に関する質問ではいくつか有意な差が見られることとなった。

さて，ここまでで興味深いのは，女性に関する結果であろう。まず，初めに学校外の友人関係を重視する割合は，女性のほうが多いということが確認され，事例研究の成果を一般化する際に，ジェンダー差への配慮という点が示唆

されたわけだが，さらに興味深い結果が見られたように思われる。

すなわち，それは学校外の友人関係を重視する割合と同時に，親との人間関係を重視する割合もまた女性のほうが高かったということである。そして，これらの人間関係に対する意識面でも，おおむね肯定的に考えている項目の多くについて，女性のほうの割合が高かったということ，さらには，学校内の友人関係を重視するものの割合はほぼ9割に達していたということからすると，先に見た，学校外の友人関係は家族や学校で「疎外」されたものが形成しているとする議論が，とりわけ女性に関して，あてはまらないように思われてくる。

3．4．学校外の友人関係の重視とその他の人間関係の重視

それでは，より明確にするために，学校外の友人関係を重視する者とそうでない者とを，それぞれ“重視群”，“非重視群”と名づけ，以上に見てきたような点に違いが見られるのか，検討してみたい。

まず，先に表1で見た，どの人間関係を重視しているかという質問について，学校外の友人関係の“重視群”と“非重視群”の傾向を比べた。さらに性別をクロスさせて，その結果を表したのが表5である。

すると女性の場合においては，家族や学校での人間関係を重視する割合に関して，2つの群の間に有意な差は見られなかった。つまり女性において，学校外の友人関係を重視しているかいないかということは，その他の人間関係を重視するかしないかということと，関連がないのである。

ただ男性において，唯一，重視群の方が親との人間関係を重視する割合が少ないという有意な差が見られた。この点についてだけは，確かに先行の議論があてはまっているかにも見えるが，さらに意識面での検討に移ろう。

3．5．学校外の友人関係の重視とその他の人間関係に対する意識

次に，家族と学校における人間関係に対する8項目の意識(依存度，自由さ，リーダーの必要性，対等感，愛着感，安心感，信頼感，連帯感)について，“重

表5．学校外友人関係の重視とそれ以外の人間関係の重視
（「重視する」という回答について表記）

N（回答者数）	男性：校外友人 重視群 27人	男性：校外友人 非重視群 108人	合計 135人	女性：校外友人 重視群 41人	女性：校外友人 非重視群 93人	合計 134人
Q9．1．親　＊＊（男性のみ）	5 18.5%	43 39.8%	48 35.6%	22 53.7%	46 49.5%	68 50.7%
Q9．3．兄弟姉妹	8 29.6%	28 25.9%	36 26.7%	14 34.1%	23 24.7%	37 27.6%
Q9．6．現在の学校の先生	1 3.7%	9 8.3%	10 7.4%	5 12.2%	11 11.8%	16 11.9%
Q9．7．現在の学校の友達	24 88.9%	98 90.7%	122 90.4%	36 87.8%	85 91.4%	121 90.3%
Q9．9．交際している特定の異性	3 11.1%	18 16.7%	21 15.6%	2 4.9%	11 11.8%	13 9.7%
Q9．10．その他	0 0.0%	1 0.9%	1 0.7%	1 2.4%	0 0.0%	1 0.7%
Q9．11．特に誰ということはない	0 0.0%	3 2.8%	3 2.2%	0 0.0%	2 2.2%	2 1.5%

視群と”“非重視群”で差があるかを男女それぞれの場合について調べた。その結果を表記したのが，表6と表7である。

表6は，家族に対する意識についての“重視群”“非重視群”の差を見たものだが，いずれもほとんど差が見られない中で，一点だけ興味深い結果が得られている。すなわち女性の場合において，家族に対する安心感が，“非重視群”が78.5%であるのに対して，“重視群”の方が95.1%と高いという結果である。つまり女性の場合，学校外の友人関係を重視するものの方が，家族に対する安心感が高いのである。[10)]

次に，学校内における人間関係に対する意識についてだが，この結果を表記したのが表7であり，同様に一点だけ，興味深い結果が得られている。すなわち，女性の場合にのみ，学校外の友人関係を重視するものの方が，学校に対する安心感が高いという結果であり，“重視群”が90.2%であるのに対し，“非重視群”は71.0%となっている。[11)]

表6．学校外友人関係の重視と家族に対する意識
（「そう思う・まあそう思う」の合計。ただし※は質問が逆。）

N（回答者数）	男性：校外友人 重視群 27人	男性：校外友人 非重視群 108人	合計 135人	女性：校外友人 重視群 41人	女性：校外友人 非重視群 93人	合計 134人
Q26. 1.家族・依存度（※だんらんより自分の部屋）	16 59.3%	49 45.4%	65 48.1%	30 73.2%	57 61.3%	87 64.9%
Q26. 2.家族・自由さ（※家族の行動優先）	12 44.4%	55 50.9%	67 49.6%	26 63.4%	57 61.3%	83 61.9%
Q26. 3.家族・リーダー必要性（家族の中心となる人が必要）	21 77.8%	84 77.8%	105 77.8%	31 75.6%	71 76.3%	102 76.1%
Q26. 4.家族・対等感（※親の言葉に従うべき）	15 55.6%	44 40.7%	59 43.7%	16 39.0%	39 41.9%	55 41.0%
Q26. 5.家族・愛着感（家族はかけがえがない）	26 96.3%	102 94.4%	128 94.8%	40 97.6%	86 92.5%	126 94.0%
Q26. 6.家族・安心感　＊＊（女性のみ）（家族といると安心）	22 81.5%	87 80.6%	109 80.7%	39 95.1%	73 78.5%	112 83.6%
Q26. 7.家族・信頼感（家族に何でも打ち明けられる）	7 25.9%	37 34.3%	44 32.6%	24 58.5%	47 50.5%	71 53.0%
Q26. 8.家族・連帯感（家族みんなで助け合うべき）	23 85.2%	100 92.6%	123 91.1%	41 100.0%	91 97.8%	132 98.5%

表7．学校外友人関係の重視と学校に対する意識
（「そう思う・まあそう思う」の合計。ただし※は質問が逆。）

N（回答者数）	男性：校外友人 重視群 27人	男性：校外友人 非重視群 108人	合計 135人	女性：校外友人 重視群 41人	女性：校外友人 非重視群 93人	合計 134人
Q29. 1.学校友人・依存度（※級友との付き合いは校内だけ）	23 85.2%	94 87.0%	117 86.7%	35 85.4%	83 89.2%	118 88.1%
Q29. 2.学校全般・自由さ（※学校行事には参加するべき）	9 33.3%	25 23.1%	34 25.2%	4 9.8%	17 18.3%	21 15.7%
Q29. 3.学校友人・リーダー必要性（クラスの中心となる人が必要）	24 88.9%	82 75.9%	106 78.5%	34 82.9%	78 83.9%	112 83.6%
Q29. 4.学校先生・対等感（※先生に従うべき）	13 48.1%	40 37.0%	53 39.3%	15 36.6%	31 33.3%	46 34.3%
Q29. 5.学校全般・愛着感（学校に愛着）	18 66.7%	71 65.7%	89 65.9%	34 82.9%	69 74.2%	103 76.9%
Q29. 6.学校全般・安心感＊＊（女性のみ）（学校生活は快適）	18 66.7%	75 69.4%	93 68.9%	37 90.2%	66 71.0%	103 76.9%
Q29. 7.学校友人・信頼感（級友を信頼）	23 85.2%	90 83.3%	113 83.7%	34 82.9%	76 81.7%	110 82.1%
Q29. 8.学校友人・連帯感（クラスみんなで助け合うべき）	24 88.9%	100 92.6%	124 91.9%	39 95.1%	84 90.3%	123 91.8%

3．6．学校外の友人関係の重視と規範意識

では，そもそも学校外の友人関係を重視するものが，果たして本当に非行に及ぶ可能性があるのかどうか，という点を検討しよう。確かに，調査データから，回答者個々人が実際に非行行動に至っているかどうかは確かめにくいかもしれない。しかしながら，社会規範に関する質問への回答傾向からは，興味深い知見が得られた。

表8は，社会規範からの逸脱と思われる8種類の行動それぞれについて，「他人がそのような行動をすることを認められるか」という質問に，「他人のそのような行動を否定する」と回答した者の割合を，学校外の友人関係の“重視群”と“非重視群”とで比較し，男女別に表記したものである。

表を見て分かるように，男女それぞれすべての項目において，学校外の友人関係を重視するものほど規範意識がゆるいという関連は認められなかった。つまり，もはや学校外の友人関係を形成するものが非行に及ぶ可能性があるとい

表8．学校外友人関係の重視と規範意識
（「他人のそのような行動を否定する」という回答について表記。）

N（回答者数）	男性：校外友人			女性：校外友人			※男女差
	重視群 27人	非重視群 108人	合計 135人	重視群 41人	非重視群 93人	合計 134人	
Q25．1．禁煙場所の喫煙	15 55.6%	68 63.0%	83 61.5%	28 68.3%	57 61.3%	85 63.4%	
Q25．2．自転車泥棒	17 63.0%	84 77.8%	101 74.8%	36 87.8%	80 86.0%	116 86.6%	**
Q25．3．行列の割り込み	19 70.4%	84 77.8%	103 76.3%	35 85.4%	69 74.2%	104 77.6%	
Q25．4．空き缶の投げ捨て	15 55.6%	72 66.7%	87 64.4%	35 85.4%	68 73.1%	103 76.9%	**
Q25．5．未成年者の飲酒・喫煙	8 29.6%	32 29.6%	40 29.6%	18 43.9%	30 32.3%	48 35.8%	
Q25．6．無免許運転	13 48.1%	56 51.9%	69 51.1%	29 70.7%	61 65.6%	90 67.2%	***
Q25．7．学校を休む	9 33.3%	32 29.6%	41 30.4%	11 26.8%	30 32.3%	41 30.6%	
Q25．8．学校で暴力	20 74.1%	86 79.6%	106 78.5%	32 78.0%	75 80.6%	107 79.9%	

う議論は，あてはまっていないように思われるのである。

むしろこれらの規範意識においては，男性と女性との間に有意な差のある項目が見受けられた。すなわち，「自転車泥棒」「空き缶の投げ捨て」「無免許運転」の3つであり，いずれも男性のほうが女性よりも規範意識がゆるくなっているのが特徴的であった（それぞれ「否定する」の割合が，男性全体74.8%：女性全体86.6%，男性全体64.4%：女性全体76.9%，男性全体51.1%：女性全体67.2%）。

つまり規範意識についても，学校外の友人関係を重視しているか否かとは関連がなく，むしろ男女のジェンダー差と関連があったわけである。

3．7．分析のまとめ

ここで一旦，分析結果をまとめておきたい。まず実態として，決して少なくない高校生が，学校外の友人関係を重視しているということがわかった。またその割合については，男性20.0%に対して女性30.6%と，女性のほうが有意に高く，同様に親との人間関係を重視するものの割合についても，女性のほうが有意に高かった。さらに，学校内の友人関係については，男女ともに9割を超える，ほとんどの高校生が重視しているということが分かった。

次に，学校外の友人関係の位置付けに関してだが，これについては既存の人間関係における「疎外」の結果として捉えようとする先行の議論とは，やや異なる結果が得られた。すなわち，学校外の友人関係を重視するか否かということと，他の家族や学校における人間関係を重視するか否かということの間にはほとんど関連がなかった。特に意識面で，女性においてはむしろ学校外の友人関係の“重視群”のほうが，家族や学校に対する安心感が高いという結果は，「愛情への欲求不満や自己否定的な感情」という「疎外」状況（住田・高島・藤井1999）とは言い難いものであった。

さらに，規範意識についても，学校外の友人関係を重視するか否かとはまったく関連が見られず，「疎外」されたものの非行，あるいは逆に“対抗的な自

立”と捉えるいずれの場合にせよ，そのように学校外の友人関係を重視するものを特別視するのに値するような結果はほとんど得られなかった。

では，果たしてこれはなぜなのだろうか。今回の結果から導かれる，近年の高校生における人間関係の状況，とりわけ学校外の友人関係をめぐるそれは，これまでの議論では理解しがたいもののように思われる。だとしたら，一体どのような理解が可能なのだろうか。残された紙幅の中で，さらに論を進め，今後の研究に向けての手掛りを得たいと思う。

4．考　　察

これまでの議論を振り返ると，高校生の学校外の友人関係を，非行あるいは“対抗的自立”の契機と捉えるいずれの場合にせよ，そこには，既存の人間関係で「疎外」されて形成された集団であるから，という理論構成が共通して存在していることに気づく。つまり，家族や学校という“本来”そこでなされるはず（べき）であった社会化過程が，成功するか失敗するかという違いはあるにせよ，全く別種の集団においてなされるはず（べき）であるという理論構成である。

しかしこの点を注意深く掘り下げると，そこに暗黙の，そしてある意味においては「規範」的な，ある理論前提が存在していることに気づくのではないだろうか。すなわち，それは次のようなものである。“とりわけ若者の人間関係においては，唯一のかけがえのない深い関係が存在している（あるいは，そうあるべきである)”，のだと。

確かにこうした理論前提に立つと，高校生で「重視する人間関係がいくつも同時にあるのはおかしい」とか，あるいは「“本来”深めるべきところ以外で人間関係が深まるのは，“本来”深める人間関係で『疎外』されているからだ」という結論に至るかもしれない。しかしながら，先に見た分析結果は明らかにこうした結論とは異なっており，そもそもこうした理論前提の問い直しが必要なのではないかとすら思われてくる。先の分析から，さらに象徴的な結果を取

り上げよう。

以下の表9は，先に表1で見たどの人間関係を重視しているかという質問について，「重視する」として選んだ人間関係の個数を男女別に表記したものである。この表において，確かに男性では“(重視する人間関係は) 1つ”という場合が35.6%と最も多くなっているが，一方女性では“2つ”という場合が40.3%と最も多くなっているのが目を引く。そこで，表記はしていないがこの表9について，“(重視する人間関係は) 1つ以下”と“2つ以上（複数の人間関係を重視する)”にカテゴリーを統合して男女間の比較を行うと，後者の割合は男性62.2%に対し女性73.9%と5%水準で有意な差が見られた。つまり，2つ以上の複数の人間関係を重視するものの割合は，全体でも7割近く，特に女性はそうしたものの割合が高いと言えるのである。

同じ点について，さらに学校外の友人関係の“重視群”と“非重視群”とで比較し，男女別に表記したのが次の表10であるが，ここでも明確な差が現れている。すなわち，学校外の友人関係の重視群においては，男性女性ともにそのほとんどが，重視する人間関係を2つ以上有しており，非重視群におけるその割合との間には非常に大きな差がある。

つまり，男性女性ともに学校外の友人関係の重視群は，それだけを重視しているのではなく，それは複数重視している中のひとつであるということ，さらに，そうした傾向は女性のほうで目立っているということなのである。

では，理論前提を問い直すとして，どのように考えていけばよいのだろうか。ここで，本論文が扱った調査とほぼ同時期の1992年に，青少年研究会が東京都と兵庫県で行った調査の結果が参考になるように思われる。その分析を進める中で浅野智彦は，若者の中に，他よりも友人数が多く，同時にいずれの友人との付き合いにも深入りし，場面に応じて友人関係もそして自分自身をも使い分けているような類型が存在しているのではないかと指摘した。つまり，中心的な人間関係がいずれかだけに限定されることがない，場面場面に応じて使い分ける，複数の親しい人間関係をもつ類型であり，浅野はこうした人間関係の

表9．重視する人間関係の個数（表1より作成）

N（回答者数）	男性 135人	女性 134人	合計 269人
1つ	48 35.6%	33 24.6%	81 30.1%
2つ	45 33.3%	54 40.3%	99 36.8%
3つ	29 21.5%	28 20.9%	57 21.2%
4つ	10 7.4%	13 9.7%	23 8.6%
5つ	0 0.0%	4 3.0%	4 1.5%
特に誰ということはない（＝0）	3 2.2%	2 1.5%	5 1.9%
合計	135 100.0%	134 100.0%	269 100.0%

表10．学校外友人関係の重視と重視する人間関係の個数

N（回答者数）	男性：校外友人＊＊＊			女性：校外友人＊＊＊		
	重視群 27人	非重視群 108人	合計 135人	重視群 41人	非重視群 93人	合計 134人
1つ以下	1 3.7%	50 46.3%	51 37.8%	1 2.4%	34 36.6%	35 26.1%
2つ以上	26 96.3%	58 53.7%	84 62.2%	40 97.6%	59 63.4%	99 73.9%
合計	27 100.0%	108 100.0%	135 100.0%	41 100.0%	93 100.0%	134 100.0%

ありようを「選択的コミットメント」と呼び表した（浅野 1999）。こうした発想に立てば，先に見てきたような分析結果は，むしろ納得がいくものになるのではないだろうか。

また，こうした発想は，近年注目を集めている，加入の強制的な集団への所属から，むしろ個々人が個々の人間関係を形成していく状況への変化という，いわゆる“集団型社会からネットワーク型社会”へという変化とも大いに関連しよう。社会が大きな変動期にあるのだとしたら，新たな実態を見据えていくためには，実態に正面から向き合うことも重要だが，それと同時に，先入観を

廃して理論の前提から問い直していくこともまた重要なのではないだろうか。今回の分析結果から得られた最も大きな知見はこの点にこそあるように思われる。

5．結語・課題

最後に，今回の分析における問題点，ならびに今後に向けての課題に触れておきたい。

まず問題点として，2次分析であるがゆえの限界点が挙げられる。一つには，設定された質問が必ずしも分析者の意図とは一致しないという点である。今回でいえば，どちらかといえば高校生の人間関係に関する意識面についての質問が多く，例えば友人は何人いて，さらに彼らの属性や彼ら同士の関係などといった，より詳細な実態面に関する分析については行えなかった。さらにもう一つ時空間的な制約として，やや年数の経過したデータであり，かつ対象地が首都50km圏であったという点もある。

しかしながら，これらの点について，2次分析はむしろこうした問題点を明るみに出し，今後のアプローチに向けての示唆を得るチャンスなのだと，ポジティブに捉えなおしたい。上記の1点目については，実は冒頭で触れた，以前に行った事例研究はこうした詳細な実態把握（およびそのための方法論の検討）を目的に行われており，[12] 今後もそのアプローチを継続していくつもりである。また2点目については，むしろその限界を経年変化や地域間比較を行うためのメリットとして用い得るのではないかと考える。例えば，考察において紹介した「選択的コミットメント」（浅野 1999）は，ごく近年に突発的にみられるようになったものなのかとか，あるいは“都市的生活様式”の一つとして大都市圏に限定した状況ではないか（松田 2000）といった議論を呼んでいる。こうした点について，今回の調査やあるいは浅野がその概念を導いた調査からは10年近くが経過しているので，前者の疑問にはこれから行われる調査との経年比較の中で答えていくことができるし，あるいは後者についても，今後，地域間比較を行う際の足がかりとして考えていけばいいのではないだろうか。

そしてさらに，先に紹介した浅野の「選択的コミットメント」という概念についての問題点・課題にも触れておきたい。まず，これは調査結果から事後解釈的に導かれた仮説段階の概念であるために，今後実態把握を行う中で検証を重ねていかなくてはならないという点を指摘したい。その上で浅野は“友人関係”に関する質問項目の分析からこの概念を導いており，果たしてこれが，家族などを含んだ若者の“人間関係全般”についてもあてはまり得るのかという点については，さらに検討を進めていかなくてはならないだろう。

またそうした適用可能性の拡大だけでなく，概念の精緻化を図ることも重要である。そのためにはまず，本論文でも大きな注意を払ってきたように，ジェンダー差に関する検討が重要である。実はこれまで若者の人間関係については，男性は“広く浅く”，女性は“狭く深い”という議論が一般的であった[13]（例えば，伊藤編著 2000，Allan1989＝1993 など）。しかしながら，すでに見たように今回の分析結果では，高校生においてはむしろ女性のほうが“広い”人間関係であったと言え，“選択的”という発想により近いように思われた。ではそうした差がなぜ生じるのかという点についても，単に性差本質主義に陥ることなく，考察を深めていくことが重要であろう。ごく近年の調査からも，若者のうち，女性の人間関係における同様の特徴が指摘されているが（池田 2002），今後はむしろ，本論文でも女性とはやや異なる傾向も見られた，男性の場合についても詳細な検討を深めていく必要があろう。

また高校生と学校といった場合には，成績に関する問題点も浮かび上がってくる。今回は（これは 2 次分析であるための問題点でもあるが），成績に関する質問項目がなかったため，この点の検討を行うことができなかった。次回以降の課題としたい。

最後に，とりわけ教育社会学的な視点からは，若者の友人関係・人間関係がそのような状況にあるとするならば，それが社会化過程にどのような影響を与えるのかという点が非常に重要になってくるだろう。社会化過程における友人関係の機能，あるいはそもそも若者にとっての友人関係の意味といった点につ

いて，問い直していく必要があるのではないだろうか。

今後も，大きな変動期にあるこの社会における，若者の友人関係・人間関係の理解にあたって，変化する実態に正面から向き合うアプローチと同時に，理解する上での理論前提を問い直すアプローチの両方を深めていきたいと思う。

注

1）その際，調査対象者の携帯電話のメモリー機能に登録されている友人1人1人についての属性や，友人となったきっかけなどを聞き取るという試論的な方法を用いるなどして，対象者の友人関係に関するパーソナル・ネットワーク構造の実態把握に努めた。その結果，趣味を同じくする友人関係が，学校外だけでなく学校の中へとも区別なく広がり，時には母親でさえ同じ趣味を持つというような実態が見られた。詳細は，辻(2001a，2001b）を，特にその方法論については，辻（2003）を参照。

2）例えば，住田ら（1999）は次のようにまとめている。「家族においても学校においても安心感を抱くことができず，疎外状況に陥った子どもたちは同じように疎外状況に陥った子どもたちを仲間として集団を形成し，またそうした仲間の集団に加入して，仲間との集団的行動に興奮と連帯感を感じ，そこに自己の確認と安心感を見いだそうとするのである。家族のなかでの愛情の欲求不満と学校のなかでの自己否定的感情，それゆえの代償的愛情と自己再確認を求めて仲間を求めるわけである。」（住田・高島・藤井 1999：204－5）

3）同様に住田ら（1999）は次のようにまとめている。「そしてその仲間たちとは同じように疎外状況に陥った子どもたちである。同じように疎外状況に陥っている子どもたちだからこそ相互の立場を理解しやすく，共感を得やすく連帯感を抱きやすい。類似的な立場にある者同士が仲間になるのである。そしてこうした仲間との集団的行動のなかに刹那的な享楽と興奮を見いだそうとして非行に走ることになる。」（住田・高島・藤井 1999：205）

4）他には，竹内常一の「自分くずしと自分つくり」論なども後者の捉え方にあてはまると言えるだろう（竹内 1987)。また，正確に言えば，竹内や住田らの議論も高校生だけに対象を限定したものではないし，Willis の議論をとりあげるにしても，その議論が背景としている社会構造の違いには敏感でなければならないと考えている。しかしながらこれらの論点は，本論文にそのまま当てはめても，重要な視座を提供しているものと思われるために，あえてここで取り上げることとした。

5）なお分析にあたっては，東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターから調査個票データの提供を受けた。ここで関係の皆様に感謝の意を表しておきたい。

6）なお，表1とそれに関連する項目の中で，回答者が1人も選ばなかったものは除いてある（この中には「現在の職場の上司」などのように高校生においては，おそらく選ばな

いであろう者も含まれている)。また以降も含めて論文の趣旨には影響しないが，回答が偏っているために（＝ほとんどの回答者が選択した，もしくは選択しなかった)，χ二乗検定を行う際，期待度数5以下のセルの含まれるクロス表がいくつか生じたということを，念の為に注意点として記しておく。表1ではQ9.10とQ9.11であり，表2はQ36.4とQ36.5，表5はQ9.6とQ9.7にQ9.9～Q9.11，表6はQ26.5とQ26.8，表7はQ29.1とQ29.7（男性のみ）とQ29.8が該当する。

7) ただしこの場合，“学校外の友人関係”には中学校時代の友人などが含まれ，“学校内の友人関係”とかなり連続性を持つのではないかという指摘があり得るだろう。だが，どちらかといえばそれは，比較的狭い空間的な広がりの中で中学，高校時代を送ることが想定される地方部においてあてはまる指摘であり，本論文では首都50km圏在住の高校生を対象としているため，やや状況が異なるように思われる。例えば，東京都内の高校生358,825名のうち55.8%が私立高校に通学しているというデータからもそのことが推察されよう（2003年7月段階の東京私立中学高等学校協会HPによる，URL：http：//www.tokyoshigaku.com/kyokai/data/hkokukoushi.html)。もちろん今後はこうした地域差についても考察を深めていかなくてはならない。

8) この8項目の名称については，本調査の報告書に従った(生命保険文化センター1993)。

9) ただし自由さ，すなわち「家族の行動は，自分の都合よりも優先されるべきだ」という項目については，「そう思わない・あまりそうは思わない」と回答したものの割合が，男性49.6%に対し女性61.9%と多くなっており，女性の方が男性と比べて，家族との人間関係を重視し，依存し，かつ信頼感や連帯感が強い一方で，いざという時には自分自身の都合を優先させるという面も覗いているのは，また興味深い。この点は後に検討する“選択的”な人間関係の特徴のようにも思われてくる。

10) この点をさらに深めるために，家族に対する安心感と親との人間関係を重視するか否かを調べてみた。すると男女ともに，家族に対して安心感のあるものほど，親との人間関係を重視しているという結果となった。すなわち女性の場合で言えば，家族に対して安心感があるもののうち，親との人間関係を重視するものが89.7%，重視しないものが77.3%，男性の場合で言えば，家族に対して安心感があるもののうち，親との人間関係を重視するものが89.6%，重視しないものが75.9%となった(いずれも10%水準で有意)。

11) ただし，この場合は先ほどと違って，学校内の友人関係の重視を取り上げてみた場合に，学校に対する安心感との間には有意な関連はなかった。

12) こうした人間関係の実態把握に関するアプローチは，質的・量的いずれの面においても，やはり近年の都市社会学分野における進展が目覚しい。代表的なものとしては，先にもふれた森岡（2001a，2001b）など，あるいは同様のアプローチを若者に対して用いたものとしては，筆者が以前に行った事例研究（特にその方法論については，辻（2003）を参照）以外に，尾島（2001）などの量的アプローチも参照のこと。

13）前者は，発達心理学的な視点から，男性は弱みを見せたがらない一方で女性は内面を開示したがるので（伊藤編著2000），後者は予期的社会化の視点から，男性は後に広く社会的に広く活躍しなければならない一方で女性は家庭内に閉じ込められてしまうから（Allan1989＝1993），そのようになると説明している。

参考文献

Allan, Graham, 1989, *Friendship : Developing a Sociological Perspective,* New york ; Harvester Wheatsheaf（＝1993，仲村祥一・細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社）.

浅野智彦，1999，「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編，『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣：41－57.

ベネッセ教育研究所，2000，『モノグラフ高校生　vol.60　高校生の自我像　「自分探し」をする高校生』.

藤田英典，1991，『子ども・学校・社会－「豊かさ」のアイロニーの中で』東京大学出版会.

藤田英典，1998，「教育問題の社会学」天野郁夫・藤田英典・苅谷剛彦『改訂版　教育社会学』放送大学教育振興会：25－40.

池田謙一，2002，「携帯電話・PHS利用パターンの社会心理」内閣府政策統括官（総合企画調整担当）編『情報化社会と青少年　第4回情報化社会と青少年に関する調査報告書』：287－301.

井上俊，1977，『遊びの社会学』世界思想社.

伊藤裕子編著，2000，『ジェンダーの発達心理学』ミネルヴァ書房.

門脇厚司，1995，「社会化異変の様相－なぜ，いま少年少女の「異界」なのか」門脇厚司・宮台真司編『異界を生きる少年少女』東洋館出版社：3－22.

亀山佳明・麻生武・矢野智司編，『野生の教育をめざして－子どもの社会化から超社会化へ』新曜社.

加藤隆雄，1995，「社会化ポストモダンの曠野より－なぜ子どもたちは社会化されないのか」門脇厚司・宮台真司編『異界を生きる少年少女』東洋館出版社：207－28.

間宮武・田中英彦・真仁田昭・原野広太郎・高橋哲夫監修，春木豊・菅野純編著，1991a，『実践・問題行動教育大系1　子どもを取り巻く生活環境』開隆堂.

間宮武・田中英彦・真仁田昭・原野広太郎・高橋哲夫監修，菊地和典編著，1991b，『実践・問題行動教育大系2　親・教師・友人と子どもの関係』開隆堂.

松田美佐，2000，「若者の友人関係と携帯電話利用－関係希薄化論から選択的関係論へ－」『社会情報学研究』社会情報学会，4：111－22.

松井豊，1990，「友人関係の機能」菊池章夫・斎藤耕二編，『ハンドブック社会化の心理学』川島書店：283－296.

宮台真司，1996，「『郊外化』と『近代の成熟』」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・

吉見俊哉編『現代社会学講座　第10巻　『セクシュアリティの社会学』岩波書店：203－222.

文部省編，1996，『第15期中央教育審議会第一次答申－21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』ぎょうせい.

森岡清志，2000a，『都市社会の人間関係』放送大学教育振興会.

森岡清志編，2000b，『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会.

内閣府政策統括官（総合企画調整担当）編，2001，『日本の青少年の生活と意識－第2回調査青少年の生活と意識に関する基本調査報告書』.

内閣府政策統括官（総合企画調整担当）編，2002，『情報化社会と青少年　第4回情報化社会と青少年に関する調査報告書』.

中西新太郎，1995，「子ども・青年論の脱戦後－企業社会下の自立像をめぐって」竹内常一『教育のしごと4　子ども・青年論』青木書店.

中西新太郎，2001，『思春期の危機を生きる子どもたち』はるか書房.

尾島史章，2001，『現代高校生の計量社会学　進路・生活・世代』ミネルヴァ書房.

奥野卓司，2000，『第三の社会－ビジネス・家族・社会が変わる』岩波書店.

Parsons, talcott, 1951, *The Social System*, New York：The Free Press.（＝1974，佐藤勉訳，『社会体系論』青木書店）.

斎藤誠一編，2001，『人間関係の発達心理学4　青年期の人間関係』培風館.

佐藤博樹・石田浩・池田謙一編，2000，『社会調査の公開データ－2次分析への招待』東京大学出版会.

生命保険文化センター，1993，『若者の生活意識に関する調査　集団に対する意識を中心として』.

千石保，1998，『日本の高校生　国際比較でみる』日本放送出版協会.

柴野昌山，1990，『改訂版　現代の青少年　自立とネットワークの技法』学文社.

総務庁青少年対策本部，1995，『青少年の意識の変化に関する基礎的研究－「青少年の連帯感などに関する調査」第1回～第5回の総括』.

住田正樹，1990，「子どもの仲間集団の変容－活動集団から交友集団へ」『教育と情報』文部省大臣官房調査統計企画課編，390：8－13.

住田正樹，2000，『第2版　子どもの仲間集団の研究』九州大学出版会.

住田正樹・高島秀樹・藤井美保，1999，『人間の発達と社会　教育社会学講義』福村出版.

住田正樹・藤井美保・田中理絵・中田周作・横山卓・溝田めぐみ・東野充成，2002，「子どもたちの「居場所」と対人関係（Ⅱ）－小学生・中学生の場合」『日本教育社会学会第54回大会　発表要旨集録』：330－5.

高橋勇悦監修，川崎賢一・芳賀学・小川博司編，1995，『都市青年の意識と行動』恒星社厚生閣.

竹内常一，1987,『子どもの自分くずしと自分つくり』東京大学出版会.

田中治彦編著，2001,『子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わりの場」へ』学陽書房.

谷川彰英・無藤隆・門脇厚司編著，2000,『21世紀の教育と子どもたち1　迷走する現代と子どもたち』東京書籍.

東京都生活文化局，1998a,『平成9年度青少年健全育成基本調査　青少年の生活と意識及び青少年関連の各種統計資料などに関する調査報告書』.

東京都生活文化局，1998b,『第22期東京都青少年問題協議会答申』.

辻大介，1999,「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」橋元良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版：11－27.

辻泉，2001a,「『居場所』としてのファン－マス・メディアの『受け手』，若者文化の一事例研究として」(東京都立大学大学院社会科学研究科社会学専攻・平成12年度修士論文).

辻泉，2001b,「今日の若者の友人関係における構造，意味，機能－アイドルのファンを事例として」『社会学論考』東京都立大学社会学研究会，22：81－106.

辻泉，2003,「携帯電話を元にした拡大パーソナル・ネットワーク調査の試み－若者の友人関係を中心に」『社会情報学研究』日本社会情報学会，6：97－111.

Willis, Paul, 1977, *Learning to Labor : How Working Class Kids Get Working Class Jobs,* New York : Columbia University Press (＝1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房).

山村賢明・北沢毅，1992,「子ども・青年研究の展開」『教育社会学研究』日本教育社会学会，50；30－47.

吉光正絵，1997,「オッカケ・グループの形成－日常生活領域で係わる集団における孤立と非日常生活領域で形成する集団への同調行動」『家政学研究』日本家政学会，44－1；33－40.